〈討論要旨〉

討論は高山会員の司会によって行なわれた。

一、「世界独占資本主義」をめぐって

まず磯辺会員は、議論の大筋については同感であるとしながらも、環境問題や労働力破壊といった市場原理からはみだした負の側面をどうとらえるのか、またそれに対抗する作用因、周辺から中心へと反発する主体の形成を捉えることが重要ではないかと指摘した。ま

た社会主義の「崩壊」＝冷戦の終焉によって、かえって資本主義国間の団結が崩れ、多極化が進行するのではないかとの疑問も提示した。

それに対して蓮見会員は、世界独占資本主義は決して安泰なものではなく、資源、環境といった制約があるだけではなく、中心・周辺間の関係が非常に動的で緊密なものとなっており、どこで問題が発生してもすぐにそれが全体に波及するという点でも不安定な側面を持つとの回答があった。また変革の主体といった問題については、周辺から中心へという形で変革の運動が展開する可能性はあるし、村落がその一つのよりどころになるかもしれない。しかし、村落でなければならないということではなく、多様な組織化の可能性が存在するのであり、全体としてみればやはり村落の比重は低下してきていると答えた。

柿崎会員は、資本主義の運動法則そのものは理解できるが、資本主義だけが独自の論理で直線的に進んでいけるのか、環境問題や食料問題等を考慮するとき、農業が積極的な役割を果たす局面がありうるのではないか、特に経済学者に答えてもらいたいとの意見を述べた。これについては高山会員から、あまりに大きな問題で経済学者にも答えられる者はいないのではないかとの見解が示された。

庄司会員は、世界独占資本主義一般を論じるだけでは不十分であり、各国ごとの特性が考慮されねばならないのではないかと指摘した。現代資本主義は、農業、女性、社会的弱者といった弱い部分、そして世界資本主義の周辺部に矛盾が集中している。そこでは資本の運動法則に対抗しそれを規制するような様々な運動が、部分的にせよ展開されている。資本の一般法則を捉えるだけでなく、人間の権利を守るとか、民主主義の確立という観点を導入しなければならないとの意見を述べた。

それに対して蓮見会員は、今日は大きな流れということで話をしたのであり、日本資本主義の特質は次の機会に論じたい。人権的な考え方の導入という点については、運動論等の評価に関しては私が常々批判されている点であるが、難しいところだとの回答があった。

また渥美は、資本主義自体が非資本主義的な生産関係を残存させ利用することを必要としているのではないか。そうした資本の限界を捉えて、農村の側から脱資本主義的、脱商品経済的な社会関係を広めていくといった視点を欠くならば、非常に閉塞的な議論に陥ってしまうのではないかと質問した。それに対して蓮見会員は、もちろん資本主義が農業・農村を捉えてしまうといっても、小農経営の滞留という形をとるので、完全な形で資本主義的経営が行なわれるわけではないが、そこでの家族経営は資本主義的な仕組の中にはめ込まれている。しかしそのはめ込まれ方は条件によってかなり異なり、そこにずれが生じ自立的・歴史的働きを引き起こす原動力となる可能性はあるだろうと答えた。

二、村落研究の方法をめぐって

東会員は、村人の意識や行動をうまく調査することで逆にグローバルな規定要因を明らかにすることができるのではないかという見解を示した。

それに対して蓮見会員は、秋田と岡山の意識調査を見ると農民の意識と階層がますます相関しなくなってきており、意識を規定するファクターは極めて多様化してきている。意識や行動の側からその

規定要因を探っていくのは至難の業であるとの回答があった。

また松田会員は、分析単位の問題として、かつては意識研究においても家を単位として理解してきたが、既に所帯を単位とすることは適当ではなく、個人を単位にして様々な要因を数量化していくような方向が考えられなければならないのではないかと指摘した。

蓮見会員もそれは同感であるとし、今までむらと家にこだわりすぎたのではないか、一旦個人におりて捉える必要があるが、技術的に農家世帯員全員を調査対象とすることは実際には困難であると答えた。

三、その他の論点

黒崎会員からは、蓮見会員が富山村の世帯について行なった後継判定について、家族の捉え方、研究の視角について自分の方法とは次元が違いすぎるとの意見が出された。

庄司会員は、蓮見会員が農地改良を国家独占資本主義の農村再編政策と表現されたことについて、確かにそうした一面はあるが、民主化の側面を過小評価すべきではないとの見解を述べた。蓮見会員は、民主化の側面を無視したのではなく、それのみを強調するのは問題だと指摘したのだと回答した。

最後に高山会員が議論を集約され、資本は人間的自然と客体としての自然を資本の運動法則に完全には包摂しきれない、そうした対抗関係が資本そのものを不安定化させているのではないかと述べた。さらに高山会員は、蓮見会員は『苦悩する農村』で村落の伝統的な要素と資本の力の二重性を指摘されているが、その二重性の止揚の方向は明らかにされていない。しかし自分の考えでは村落における自然の問題といったものにどうしても資本が包摂しきれない二重性が存在するのではないか。今日示されているような大きな流れを位置付けながら、それとの対抗の中で村落あるいは農業問題を考えざるを得ないのではないか、そうした点で蓮見会員の報告は貴重な問題提起であったとして、討論をしめくくった。

（中央大学大学院　渥美　剛）